慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史学-民俗学-社会学の連続線
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2000
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.5 (2000.) ,p.91- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 「有賀喜左衛門と社会学」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20000000-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史学－民俗学－社会学の連続線

有末　賢

三田社会学会 1999 年度大会のシンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」の司会を川合隆男先生から依頼されたときは、一瞬たじろぐ感じがしたのは事実である。社会学研究科在籍中、私は有賀先生の授業に出席する機会がありながら、実際には継続して履修はしなかったといういささかほろ苦い経験があるためか、有賀喜左衛門の社会学に正面からぶつかっていったという経験や自覚はない。しかし今回のシンポジウムは全体として、報告者の諸報告も充実していたし、討論者からの発言も世代や問題関心の多様さを反映して、とても多彩な印象が感じられた。討論者の中筋直哉氏と三浦直子氏だけが、実際の有賀喜左衛門先生とはお会いしていない世代であるが、私自身も柄澤行雄氏とほぼ同学年であったが、柄澤氏が在学中、必ず有賀先生の授業には出席していたのと比べると、「狭間」の世代あたりに位置しているのかもしれない。

私の印象では、三田の社会学研究科で中井信彦先生と有賀喜左衛門先生は、それぞれの専門分野は歴史学（社会史）と村落社会学（農村社会学）で異なっていたが、柳田國男の民俗学を間にはさんで、歴史学－民俗学－社会学のいわば「連続線上」を形成していたように思えるのである。中野卓氏が報告の中でも強調していたように、「有賀は、対象とする社会を常に歴史的現実とした」という点は、今日の現代社会学の状況を考える際に、重要なヒントとなる。つまり、日本の社会的現実を社会学的な実証研究の対象として設定していく場合に、「歴史学－民俗学－社会学の連続線」という研究の系譜・方法は、つい最近までは確実なものとして存在していたわけである。しかし、今日の社会学に進もうとする学徒たちの研究の方法や系譜をみると、哲学もあれば、認識論、言語論、文化研究（カルチュラル・スタディーズ）、コミュニケーション研究、地域研究など例え実証研究と言えども、「歴史学－民俗学－社会学の連続線」を意識することなどほとんど少なくなっているのではないだろうか。

私自身は、生活史（ライフヒストリー）研究の途上で、有賀喜左衛門の「生活把握」や「生活組織」などの諸概念を吟味する必要性を特に感じた。既に鳥越皓之「有賀理論における生活把握の方法」（同『トカラ列島社会の研究』所収，381-410 頁，御茶の水書房，1982 年）や桜井厚「有賀理論の方法的基礎と生活史研究」（柿崎京一・黒崎八州次良・間宏［編］『有賀喜左衛門研究－人間・思想・学問－』所収，171-209 頁，御茶の水書房，1988 年）などの業績があるし、今回の報告でも平野敏政氏がその点については指摘しておられた。私自身は最近、「生活誌研究と奥井復太郎」（川合隆男・藤田弘夫編著『都市論と生活論の祖型－奥井復太郎研究』所収，137-158 頁，慶應義塾大学出版会，1999 年）において、奥井復太郎が好んで使

った「生活基盤（社会組織）－生活体系－生活理念」という諸概念の結び付きは、おそらく有賀喜左衛門の生活組織や生活意識の概念から影響を受けたものと考えている。平野氏が指摘しているとおり、有賀の生活組織の概念は「全体的相互給付関係」と称される生活における「全体性」に比重が置かれていた。奥井復太郎も都市の総合インテグレーションや生活設計、社会計画などに向かっていったのも、このような「生活の全体性」に興味を引かれていたからではないかと思われる。生活史（life history）や生活誌（life-graphy：造語）もまた人間の生活・生涯の全体性に興味を強く持っている。有賀は、生活外形としての物や民具や美術品などからも生活全体を推し量り、また経済的な「小作料」の原義からも社会関係を考察するという「特殊」から「普遍」に至る全体的な経路を常に見つめ続けてきた。有名な岩手県二戸郡荒沢村石神の大家族を中心とした集落内のモノグラフ研究は、有賀が「日本の家と村」を代表する対象として、この石神の旧家を集中的に調査することから生活の全体像へと向かっていくわけである。「個別性」はその究極の歴史的祖型を求めていくことで、やがて「普遍性」へと通じる、と言う確信のようなものが有賀にはあったのではないだろうか。

柳田國男もまた、「一国民俗学」から出発しながら、普遍の学としての民衆の学問を目指していた。中井信彦が指摘したように、柳田にとっては「一回性のない歴史学」（もう一つの歴史学）であり、民俗学という名称にこだわらなければ、「柳田学」と呼んでも良いのかもしれない。有賀喜左衛門の学問も、一般的には「有賀社会学」と総称されているが、これも「歴史学－民俗学－社会学の連続線」を「知の地平」として、その全体像を投影してみると、「有賀学」と呼んでも良いかもしれない。奥井復太郎の学問は、日本都市学会の創設者という意味で「都市学」というカテゴリーで見ることもできる。しかし、「柳田学」や「有賀学」や「奥井都市学」などの名称が問題なのではない。私が言いたいのは、それぞれの巨人たちが、学問に対して、自らの「生き方全体」で対峙したという姿勢の問題である。そうした「生活＝生（life）」全体の統合が、彼らの学問の姿だったのではないだろうか。

有賀喜左衛門も奥井復太郎も生活史研究を自ら志した人ではなかった。むしろ、中井信彦の方が『色川三中の研究』［伝記篇，学問と思想篇］（塙書房，1988 年）において、社会史としての生活史研究を展開している。しかし、有賀先生の弟子としての中野卓氏をはじめとして、鳥越皓之氏や桜井厚氏などが皆、ライフヒストリー研究を手掛けられているのを見ても、有賀喜左衛門と生活史研究の「連続線」は見え隠れする補助線として非常に重要なものであるように考えられるのである。そして、その補助線はおそらく「歴史学－民俗学－社会学」の連続線から引かれているのではないかと思われる。自らのライフヒストリーの自己反省を媒介として、他者の生活への「まなざし」を歴史的に向けていく時、生活史への視角（パースペクテイヴ）が生まれてくるものと考えられるのである。

（ありすえ　けん　慶應義塾大学法学部）